

## カンボジアにおける 労働奉仕国民運動の展開

なが た いて きぶ ろう  
永田逸三郎

### I

わたくしは昨年の12月初旬から今年の2月末にかけてインドシナ3国、すなわち南ヴェトナム共和国、カンボジア王国、ラオス王国の3つの国々の経済開発に関する現地実態調査旅行をした。ヴェトナムはクーデター失敗直後であり、ラオスは内乱の渦中にあつたため、思うように調査旅行ができなかつたのは残念だったが、治安の面からみればカンボジアは全く別天地の観があり、辺境の地にかなり深入りしてもいささかも不安はなかつた。

御承知のとおり南ヴェトナムは北緯17度線で南北に分断された旧安南帝国の1部と、フランスの旧直轄植民地であつたコーチンチャイナの全域とを包括してできた共和国で、ジュネーブ協定前からアメリカの援助(軍事援助が主であつた)を受け、その後さらに大きな軍事経済援助を受けつつあり、いまはそれなくしては国家財政がなりたないところまで進んでいる。ヴェトナムはアメリカ一辺倒で、したがって SEATO の不可欠なメンバーとして位置づけられている。

これに反し、カンボジアはもともと小さくまとまつた王国で、フランスの植民地支配の桎梏から脱して以来いち早くインドにならつて厳正中立主義の旗色を鮮明にし、それを堅持し続けている。このためアメリカやフランスなど自由陣営からの援助を受けるかたわら中共、ソ連、チェコなど一連の共産主義国家からの援助をも多く受け入れている。そして、王国とはいいながら一風変わった人民社会主義共同体をもつて国家形成の原理としているのである。この人民社会主義共同体は SANGKUM REASTR NIYUM と呼ばれ、この名を冠した政党が与党であり、議席は100パーセントを独占し、国民の99.98パーセントの支持を受けている。1960年6月5日に行なわれた国民投票の結果はつぎのような数字を示している。

シアヌーク殿下と SANGKUM に賛成  
.....2,020,349 (投票数の 99.98%)  
西方陣営につき Song Ngoc Thanh および

Khmer Serei (自由クメール) に賛成  
..... 133 (0.006%)  
共産主義に賛成..... 133 (0.006%)  
意見なし.....93  
無効.....31  
(投票権総数2,199,731, 投票総数2,020,741, したがって投票率は91.8%であつた。)

党の総裁は王たるべき元首シアヌーク殿下下である(シアヌーク殿下は1941~55年まで王位にあり、王位を父に譲つたが、昨年の父王崩御のあとは王位を継承せず国の元首となっている)。このシアヌーク殿下下の統率のもとに、内政も外政も決定づけられた方向へひたすらに力強く動いている。ファッションだとかディクテーターだとかいう非難めいた声は外国でこそ聞かれるが、カンボジアの国内には全くそうした声はない。南ヴェトナムからカンボジアにはいるとだれしもまずこうした事実驚きの眼を見張らざるをえない。足踏みすることなくカンボジアは着実に前進しているという感じを強く受ける。

同じ王国でありながら、ラオスとカンボジアはそのおい立ちをことにしている。ラオス王国の国家的統一はようやく1946年8月27日のことで、それまでは北部のルアンプラバン王朝と南部のチャンパサック王朝とが併立していた。しかしラオスが今日の悲劇の淵に身をさらすに至つた経路はきわめて簡単で、ジュネーブ協定後まず中立政策がとられたのが、1部の抵抗はあつたにせよいつのまにかアメリカ一辺倒に変貌し、それが切りくずされて内乱となり、ふたたび中立に復帰しようとしている。しかもそれは自律的というよりはむしろ他動的であるところに重大な問題があるようである。

このように、最初からアメリカ一辺倒の南ヴェトナム、厳正中立を堅持するカンボジア、中立からアメリカ偏向へ、そしてふたたび中立への道を歩むラオスと、インドシナの3つの国はまことに興味深い3つの相貌をわれわれの前に見せているのである。

こうした政治的背景を持つ3つの国の社会・経済開発計画の実施面を見てまわるのが今回のわたくしの仕事であつたが、その旅行中わたくしに最も強烈な印象を焼き付けるとともに、深い興味をいだかせたものの1つをここに紹介してみたい。それはカンボジアにおける集団労働奉仕の一大国民運動の展開である。

### II

小さな王国カンボジアは、国際的にも国内的にも独立後いくつもの重大危機に見舞われながらも巧みにそれを



(稲刈りをするシアヌーク殿下)

脱してきた。それは独立の父といわれるシアヌーク殿下の英邁と強靱な意志と理性ある決断によるものだといわれる。その殿下が身をもって体験した貴重な経験から、「着実な建国への歩み」として生み出した1つの国民運動、それがすなわち集団労働奉仕の国民運動であった。この運動について述べるに先だち、この運動の先駆となった「治水政策」に関し若干説明しておくことがある。

この国の1年は乾季と雨季の2つにはっきり分かれている。南西季節風が吹く雨季にはメコン川が氾濫し、国の中央にある太湖(トンレサップ)一帯もまた大増水し、低地という低地はすべて水の支配下におかれる。そして11月から北東季節風が吹きだすと乾季となり、国を水びたしにしていた洪水はようやく減退する。このころ減水を祝って水祭りといわれる減水祭りが昔から盛大に行なわれている。そして3~4月は最も激しい乾燥と酷暑が襲いかかり、川はすべてその川床を露出し、水田は大亀裂を生じ、トンレサップ湖は3分の1に縮小する。田んぼを行く牛車のわだちからもうもうたる砂煙が天高く舞い上がる。

雨季は洪水に悩まされるにもかかわらず、いったん乾季ともなればたちまち国は至る所水ききんとなり、人間の飲用水はいうにおよばず、家畜も農作物も渇水の暴威に容赦なくさいなまれるのである。ようやく農作業が始まる5月半ばとなると水田の耕耘、苗しろの播種のために1日千秋の思いで農民は雨の再来を待ちわびる。ところが待望の雨は気まぐれで、そのため苗しろが思いがけぬ立ち遅れをとり稲作はひどい打撃を受けることがままある。それのみか数ヶ月にわたる乾季は田畑の裏作を妨害し、多くの場合不可能にしている。ここにカンボジア農民の、カンボジア農業の、いやカンボジア経済にとっ

て治水が大きな問題としてクローズアップされる。

かつてアンコール王朝時代、王は水を支配するため王都近くに当時としては途方もなく大規模な貯水池を設け、灌漑用運河を開き出した。この先賢の明にならない、シアヌーク殿下は国民の80パーセントをしめる農民を水の苦痛から救い、その生活を向上させるために、また、輸出産業の大宗たる米作をより発展さすべく「治水政策」をうちだしたのであった。それには地方農民はもちろん、大臣も官吏も軍人も学生も青年団も、全国民が一致団結し各自のレジャータイムの1部を労働に奉仕すべきであるとし、シアヌーク殿下みずから率先範をたれている。殿下は「治水政策」以外に全国民の集団労働奉仕は道路(省、郡、村)、部落学校、スポーツ競技場、公民館、産院、部落市場、モデル農家、簡易診療所、地方図書館、バス停留所、青年団集会場などの建設や、田植え、稲刈りなどの農作業など……国家の生産関係、社会活動、保健、教育開発にも向けられねばならぬとし、機会あるごとに国民に呼びかけている。

「生産向上のために労働奉仕によって国民を援助することは、国家の指導者や官吏が国家経済を改善し国の独立を強化することにほかならない。確かにわが国の政治的独立は経済的独立によって支えられる。もしわが国の経済が弱体であるならば、われわれは国家とその独立を防衛する方法をもたねことになる。外国の援助に依存しているかぎり独立国としての諸政策を遂行することはきわめて困難であるし、われわれの信念や理想を貫くことも至難である。わが国を苦境におとし入れ、また外国援助なくしてはわが国は存続しないとみる国々は、われわれを脅迫し威嚇しようとしている。だからこそわれわれはあらゆる犠牲を払って、きわめて近い将来に外国援助なくとも国は滅びないということにならねばならない。」

「現在アジアでは中共とわがカンボジアの2つの国だけにこのような労働奉仕の活動がみられる。われわれは経済・社会開発5カ年計画により国民所得を年間3%上げる予定であるが、この計画をペーパープランに終わらせないために、新しいカンボジアを実際に造りあげるために、われわれ全国民は高い情熱をもってこの奉仕運動を推進せねばならない。われわれは他の国民にりっぱな手本を示すことになるのだから、大きな誇りをもってこの運動にうちこむことができるのである。」

このような集団労働奉仕の国民的展開はなにも中共やカンボジアの専売特許ではない。ソ連では官吏、学生、軍隊の大動員によって東部に3000ヘクタールという新し

## 現地報告

い土地を開拓し収穫作業にも参加している。ランゲン市では、市民と軍隊の労働奉仕によってわずか4～5週間で戦争による破壊の跡かたづけをしたし、スエズ動乱のあと破壊されたポートサイド市は、あらゆる階層の青年の参加によりわずか3カ月で復興した。カイロ市では年1週間の清掃週間には大臣も政府高官も市民に協力しているといわれている。

1959年8月27日のカンボジア政府の閣議は労働奉仕についてつぎのようなことを決定した。すなわち、

(1) 政府の閣僚、議員およびすべての官吏は1カ年のうち30日間を国営農場や土木関係の諸工事その他生産関係の労働に従事しなければならない。

(2) カンボジア王国軍司令官ロンノル将軍の要請により、王国の軍人たるものはすべて前記同様の義務をはたさねばならない。

(3) 学生、生徒は1週間のうち半日だけ私企業関係で労働に従事してもらいたい。

シアヌーク殿下は、次代のにない手である学生に対する演説のなかで特につぎのように強調している。

「教育は急速に発展した。しかしわが国は毎年50万人にも達する学校卒業生のうち、農業、工業、手工業に吸収しうるのはその20～30パーセントにすぎない。特に農業については（ペンを持ったがゆえに）若者たちはこれを軽べつする。農耕のため、大地の労働のためにいなかへ帰ってゆく卒業生は10パーセントにもみまない。インテリや自称インテリは日増しに増加しつつある。かれらは大地と結びつかないのみか、政府が提供するホテル業、工業、運輸業のような肉体労働への就職は見向きもしない。それらをくだらぬ仕事と考えている。そして無競争で官吏になりたがっているが、競争試験を受けたならおそらく満足な解答もできぬものが多いだろう。独立国家の苛烈な要求に対して全く無為徒食の徒であり、バックボーンをたぬこうした失業者がたえず増加してゆく。カンボジアは「やせ細った胴体と萎縮した手足にもかかわらずをもった、しかも数トンもある巨頭をもった人間」にたとえることができる。巨大な頭とは官庁のことで、その膨大な人員は国家予算の60パーセントを食っているのである。国民経済をいささかも支えず、技術知識を身につけず、大地との結びつきを軽べつし肉体労働を嫌悪する学校卒業生に対しては、国家の上層部の人間がまずそのよき手本を示してやらねばならない。王族も大臣も議員も進んで労働の名誉を確保するための十字軍に参加しなければならない。カンボジア王国社会主義は、

階級の平均化、国民の連帯責任感の高揚、国民の幸福の増大、生活水準の向上、生産の増大など……のために国民全体が団結し、重点指向された大目的に向かって前進を続けることを要求する。」

## III

集団労働奉仕の先駆的運動の1つである「治水政策」に関する綱領についてその概要をみてみよう。

### 1 目的

(1) 地方部落に井戸や池を掘り、現存の貯水池をさらって1カ年を通じ十分な飲料水を国民に供給する。(2) 雨水、特に洪水期の水をたくわえる貯水池を構築し、乾季における稲作に給水するばかりでなく、えん堤や灌漑用運河を建設して裏作や補助作物の栽培を可能にする。

### 2 原則

全住民を説得して井戸や池やえん堤などの建設工事に参加させる。これらの工事は結局住民自身の利益となるからである。住民が自分らの手で作りえないもの、現地で入手できないもの、すなわちセメント、鉄材、ダイナマイト、唐ぐわ、つるはし、杭などの資材の購入には政府は財政的援助を与える。技術上の援助ももちろん与える。

### 3 計画

農閑期である乾季に工事を開始するため雨季のうちに各種のプランを作成する。(1)年間を通じていつも水がある地点のモザイク・プラン、(2)現存の、しかもしゅんせつする価値のある池や井戸や貯水池のモザイク・プラン、(3)乾季になるとただちにとりかからねばならぬ井戸、池、えん堤、灌漑用運河のプラン。

これらの計画作成の基本としての考え方は、(1)1村もしくは5戸のグループごとに井戸を1つ、または30平方メートルの池を1つ。(2)30戸の部落に対しては2辺が30メートルと40メートル、深さ3メートルの池を1つ作る。上記のような戸数人口での井戸や池の工事作業は困難ではない。井戸か池かそのどちらを作るべきかはその地域の土質や事情に詳しい住民の意見が尊重されるべきであるし、えん堤や灌漑運河で多少とも規模の大きなものについては、河況や勾配の総合的研究を要するので技術当局の援助を仰ぐこと。

### 4 作業および工事現場での組織

(1) 自力集団で働かねばならぬ地方住民の場合、工事が長びくと効率の高い平均化された労力の規則正しい

供給ができないので、部落ごとに推進メンバーを選出して委員会を作るか、あるいは工事ごとに委員会を作る。このような委員会によって事前に各人のなすべき任務が決定されていれば自分の家族の援助と支持がえられるし時には夜業すら可能となる。(2)測量技術は土木局、地方省土木部に依頼すること。

5 運動の推進方法

(1)住民個人間、部落間、郡や省の間で、たとえば学校校舎建設計画のようにたがいに競争心をあおること。(2)同規模の工事を他より早く完成した部落に対しては報賞を与える。(3)最も優秀な井戸や池やえん堤に対しては記念標識を立てる。(4)僧侶の労働奉仕への参加はきわめて有効であることにも留意すること。

6 決論

「治水政策」の実施は決して困難なはずはない。カンボジア農民は1年のうち6カ月しか働かない。働かないのでなく働けない条件下にあるのだが、この乾季の農閑期の6カ月間は非常に大きな労力を提供できるわけである。このように十分に活用できる大きな労力があるかぎり、関係当局の責任者は部落住民の連帯責任感を鼓舞し、連帯責任感を巧みに指導する委員会を結成させ、その委員会に精神的支柱を与えてやることに努力を傾注しなければならない。

IV

さて労働奉仕国民運動が展開されはじめてから1959年末までの2カ年間につぎのような実績をあげたと1部が発表されている。(Bilan de l'Oeuvre du Sangkum du 7<sup>ème</sup> au 8<sup>ème</sup> Congrès National 1960)。しかしこの発表ははなはだ大づかみなもので、たとえばえん堤や貯水池や道路などについていえば、その規模や延べキロ数はもちろん、それらの完成によってもたらされた耕地面積の拡大、農業生産の向上性、畜産開発などについて詳細なデータを明示していないのは残念である。

小学校、初級中学校	600校
えん堤	280カ所
橋	200
灌漑用運河	100本
井戸	7,000
池、貯水池	3,000
簡易診療所、産院	30
道路(新設、補修)	1,330キロ

1960年度の実績については残念ながらわたくしはまとまった資料をまだ入手していないが、その実績のすばらしさについては期待してまちがいないと思う。たとえば

昨年の1月1日から着手され、3カ月でそれぞれ完成をみたつぎの3つのえん堤建設工事などそれを裏証してあまりある1例となろう。この工事には平均1日に1000名の奉仕団が参加したといわれている。

- (1) Chhouk Sar えん堤 (タケオ省)
  - {貯水量 3,500,000m<sup>3</sup>
  - {灌漑面積 400Ha}
- (2) Lom Pou えん堤 (カンポット省)
  - {貯水量 3,000,000m<sup>3</sup>
  - {灌漑面積 400Ha}
- (3) Veal Sas えん堤 (コンボンチャム省)
  - {貯水量 2,500,000m<sup>3</sup>
  - {灌漑面積 350Ha}

このえん堤完成によって乾季の裏作が可能となった訳である。

このほかに首都プノンペン市と新しい海港シアヌークビル市(シム湾に面する)とを結ぶ280キロの鉄道建設計画が昨年発表され、路盤工事はすべて国民の労働奉仕に依存することになっていたのであるが、すでに数十キロの路盤が築造されたのみか、1部ではレールも敷かれたという超スピードぶりをみせている。

こうした建設的な労働に大きく奉仕しているものの1つにクメール王国社会主義青年団(Jeunesse Socialiste Royal Khmère—略してJ. S. R. K.と呼ばれている)の活動があることを忘れてはならない。この青年団は1957年にシアヌーク殿下を総裁として「国家の名誉と利益を守り、クメール社会主義を實踐する」ために結成されたもので、1960年4月現在で団員44万5040名を擁している(うち女子団員は9万7071名)。入団最低年齢は8歳となっているが、最高年齢は別に制限していない。土木建設工事のみならず、収穫作業などにも参加するこの若い集団の力はカンボジアの最も大きな誇りの1つだといわれている。

労働の貴さと誇りを体得させ、官民の精神的紐帯を強化し、社会・経済開発の基盤を作り、階級差の地ならしをして国民精神の高揚と生産向上、生活水準の引き上げへと国民をたくましく推し進めてゆくこの集団労働奉仕運動は、「全努力を傾注してつねに前進」とか、「3年刻苦労働、千年安楽」の合いことばのもとに行なわれている中共の集団労働と軌を一にしているが、とにかく若いカンボジア王国が幸福と繁栄のために力強い前進を続けていることに絶対まちがいはなく、しかも東南アジア諸国のうちで他に例をみない1つの新しい国造りの手本を示しつつあることもこれまたまちがいないところである。(アジア経済研究所 所員)